

茅盾(沈雁冰)と「牯嶺から東京へ」に関するノート(三) 革命文学論争覚え書(10)

中井政喜

- 、はじめに
- 、自然主義の提唱へ(以上、第21巻第2号)
- 、小説をめぐる問題について(以上前々号、第22巻第2号)
- 、マルクス主義文芸理論の受容(今号)
 - 一、新ロマン主義の再浮上
 - 二、新ロマン主義の理想(「非戦」)・思想(「民衆芸術」)の否定
 - 三、三篇の文章(以下予定)
- 、革命文学論争

、マルクス主義文芸理論の受容⁽⁵⁷⁾

この章では1923年頃から1927年頃の時期における茅盾の文学観の変遷、またマルクス主義文芸理論の受容と、それをどのように中国に、また自らの文学観に適用したのかという問題を取りあげる。この間、政治的状況に関しては、1925年に五三〇事件が発生し、1926年北伐戦争が始まり、茅盾は国民革命に参加する。また1927年に国民革命が挫折した。この激動の期間における茅盾の文芸観を概観する。

一、新ロマン主義の再浮上

茅盾は後に、「文学与政治的交錯」(『我走過的道路』上冊、生活・読書・新知三聯書店、1981・8)で、「大転変時期 何時来呢」(『文学』週報第103期、1923・12・31)の章を引用しながら、次のように回想する。

『私たちは、全く人生から離れて、しかもたわごとを言う中国式唯美的作品に断固反対する。文学は煩悶する人々に気晴らしを与え、現実を逃避する人々を陶醉させるだけではない。文学は人心を励ます積極性を持つものであると信ずる。とりわけ私たちの時代において、文学が民衆を呼び覚まし、彼らに力をあたえる重大な責任を担いうるようにと希望する。』

この文章は、私の文学の道において、また新しい一歩を踏みだしたことを印している。私はここで宣言した。人生のための芸術は積極的芸術でなければならない、民衆を

呼び覚まし、人心を励まし、彼らに力をあたえる芸術でなければならない、と。」(「文学与政治的交錯」前掲、1981・8)

茅盾は、何を契機として1923年頃以降、文学の「人心を励ます積極性」に注目するようになったのであろうか。そしてそれは何故後年、「新しい一步を踏みだした」ものと茅盾によって理解されたのだろうか。上記の問題について、以下三点にわたって述べることにする。

第一に、五四の高揚期以後における青年の失望落胆の状況があり、それに対する茅盾の再認識があった。茅盾は「雑感」(『文学旬刊』第74期、1923・5・22)で、1923年当時における中国の青年の意気消沈した状況を述べ、青年を慰め、勇気づけることが文学者の責任であるとする。

「私たちの青年の思想は、五四以来、急激に変化しているのではあるまいか。しかも高揚から意気阻喪へと入っているのではないか。六三〔5月4日の北京の学生運動に対する6月の弾圧を受けて、6月3日上海の学生・労働者が起こした運動 中井注〕の熱烈な行動を思い返し、あるとき上海の各学校の童子軍がいかにも南京路で秩序を保っていたか、女子学生がどのように各大通りでピラをまいたか、を思い起こす。そのときの燃えるような精神、あふれる楽観と、現在の半睡眠半麻酔状態とを比較すれば、まことに幻滅の悲哀に耐えない。熱烈な運動はすでに過ぎ去り、興奮が終わった後の疲労と意気消沈の一刹那が継続している。空虚な苦悶が人の心を乱している。このときにあって、慰めを与え、新しい力を喚起するのが文学者の責任である。」(「雑感」前掲、1923・5)⁵⁸⁾

文学は慰めと新しい力を意気阻喪する青年に与えるべきものであって、モルヒネの服用のように、現実の苦痛、卑しさを忘れさせるものであってはならない。

「文学とは人生を批評するものであり、文学は現在の人生の欠点を指摘し、この欠陥を救済する理想を示すものであると信ずる。そのため私はあらゆる傑作を愛読する以外に、とりわけ『ジャン・クリストフJean Christophe』を愛読する。というのも作者は私たちに、悪い環境の中にあっても悲観せず、万難をへて意気消沈しない真の勇気を教えてくれるからである。私はとりわけ『リュクサンブールの一晩』を愛読する。というのも作者は私たちに、現代人の煩悶を取り除く方法を教えてくれるからである。」(「雑感」『文学旬刊』第76期、1923・6・12)

「国内の青年に元気を出させ、煩悶の深みから救い出し、悲観のために意気消沈することのないようにさせるには、この二冊の文学書が症状に合う良薬であると思う。」(同上)

人生の欠点を指摘し救済の理想を示して、かつ青年を力づける文学とは何かと茅盾が言及するとき、それは新口マン主義の文学であった。1922年中頃にいったん底層流として

後景に退き、そして茅盾の内面に沈んだ新口マン主義の作品が、ここに再び、落胆消沈する中国青年の対症の「良薬」として取りあげられ、表面に浮上した⁽⁵⁹⁾。

第二に、茅盾の言う、「人心を励ます積極性」（「大転変時期 何時来呢」、前掲、1923・12）を持つ文学については、1923年10月20日に創刊された週刊『中国青年』の影響を考えなければならない⁽⁶⁰⁾。恽代英は「八股？」（『中国青年』第8期、1923・12・8、底本は、『中国青年』全4巻、史泉書房影印、1970・7）で次のように言う。

「現在の新文学がもしも国民の精神をかき立て、民族独立と民主革命の運動に国民に従事させることができるならば、当然一般の人の尊敬を受けるべきであると思う。もしもこの文学が結局八股文のように役に立たず、或いはさらに悪い影響を生ずるとすれば、私たちはそれにどのような文学上の価値があるのかを問う必要はない。私たちは八股文に反対するように、それに反対すべきである。」（「八股？」、前掲、1923・12）

茅盾はこれを受けて、「代英君のこの話は、痛快の極みである。」（「雑感 読代英的『八股？』」、『文学』週報第101期、1923・12・17⁽⁶¹⁾）とし、中国の耐えがたい現実の中で、空想的感傷主義と逃避の思想によってこの現実を改革できないものとするならば、恽代英の抗議の意味を考えなくてはならないとする。茅盾は、中国の現実の変革に何らかの有効性を持つ文学に共感を示している。ここで茅盾は文学それ自体の価値を問題にしていない。この点からすれば、むしろ中国変革者としての立場が茅盾にとってより大きな比重を占めていると思われる。また鄧中夏は、「貢獻於新詩人之前」（『中国青年』第10期、1923・12・22）で次のように言う。

「社会の実際の生活を描写する作品を多く作らねばならない。（中略）もしも新詩人が社会の実際の生活を描写する作品を多く作ることができ、徹底的に思う存分暗黒の地獄を明らかにし、人々の不安を引き起こして、人々の希望を暗示することができるならば、社会を改造する目的は迅速に円満に達成できるであろう。」（「貢獻於新詩人之前」、前掲、1923・12）

こうした『中国青年』の論者たちの、中国変革を志向して青年に積極的に働きかけようとする姿勢、意志が⁽⁶²⁾、茅盾の文学論における姿勢にも影響を及ぼしていったと思われる。1922年自然主義文学を提唱したときの、失望落胆・悲哀にとどまる文学をも容認することからの、また旧派文学・旧文学の、遊びの文学、無病呻吟の文学に対比して真情の流露する文学に対する肯定的評価からの⁽⁶³⁾、一步の踏みだしであったと思われる。文学が現実の欠点を指摘し、かつそれを救済する方向を示すような、積極的に現実と関わる方向への一步の踏みだしであったと思われる⁽⁶⁴⁾。

第三に、中国の情勢の推移に伴う、創造社に対するその後の茅盾の批判の進展があると思われる。茅盾は、当時の青年の意気消沈する状況を述べ、青年の中に「唯美派」（創造社を主として指す）の空想的感傷と現実逃避の傾向が蔓延する危険性の存在を指摘す

る。茅盾は「雑感 讀代英的『八股?』」(前掲、1923・12)で次のように言う。
「青年文芸家よ。(中略)第一に、まず空想の樓閣から抜けでて、周囲の現実の状況を見なければならぬ。もしも君が明日死ぬつもりでないのなら、この現実の生活に耐えがたいところがあると感ずるだろう。もしも現在の政局と社会が、空想的感傷主義と逃避の思想で改革できるものでないのなら、恐らく恠代英君の抗議をすこし考えてみないはずはないだろう。」(「雑感 讀代英的『八股?』」、前掲、1923・12)⁶⁵⁾

茅盾は、「文学与政治的交錯」(『我走過的道路』上冊、生活・讀書・新知三聯書店、1981・8)で1923年当時を振り返り、次のように言う。

「同時期の《中国青年》にはなお鄧中夏の 新詩人的棒喝 という一文も載った。それは、『芸術のための芸術』の『新ロマン主義者』を自認する者を皮肉ったもので、彼らももっぱら行っているのは『自然の鑑賞』、『恋愛の謳歌』、『虚無の賛美』という『大概に欠けたこと』であり、『浅薄でしかも極めて下劣である』。1923年第11期の《中国青年》にはまた蕭楚女の 詩的方式与方程式的生活⁽⁶⁶⁾が掲載され、次のように言う。

『彼らのすべての言行は、彼ら自身においては、なお“名士”、“芸術のための芸術家”、“風流才子”、“高尚逸士”と自認する。……しかし我々普通の心理を持つ客観的な人間から見ると、ただの“狂人”である。……彼らの狂人生活は、“ロマン”を除けば、ほかの意味はない “詩”が想像に成立するという構造上の虚構と同じである。』」(「文学与政治的交錯」、前掲、1981・8)

茅盾は、鄧中夏と蕭楚女二人の文章の観点を支持し、「大転変時期 何時来呢」(『文学』週報第103期、1923・12・31)を書いたとする。そして茅盾は次のように言う。

「上に挙げた鄧中夏と蕭楚女の文章も、当時『芸術のための芸術』を高唱した創造社に対して痛烈に批判したものである。」(「文学与政治的交錯」、前掲、1981・8)

茅盾の言う、民衆を呼び覚まし、人心を励まし、力をあたえる文学(「大転変時期 何時来呢」、前掲、1923・12)とは、茅盾にとって先ず、新ロマン主義の文学、ロマン・ロラン等の文学を念頭に置くものであった(「雑感」、前掲、1923・6・12)。さらに、空想的感傷と現実逃避の傾向を助長する創造社の文学に反対する内容を含むものであった。またそれは、『中国青年』の恠代英等の呼びかけに呼応して、中国の現実の社会変革に参加を促し、それに資するような文学であり、新ロマン主義の文学をも含んで、さらに一層積極性を持つ文学を意味したと推定される。それは、以前のように(1920年頃)、主として西洋の文学思潮進化史の考察から導きだされた新ロマン主義の主張ではなく、意気消沈する中国の青年の現状を憂え、中国の社会情勢の進展を図る立場から、中国変革を志す者として唱えられたものである。それは言うならば、茅盾の文学論の中心軸が旧社会旧文化の変革を目指す人生のための文学から、国民革命(民族独立と民主革命、恠代英、「八股?」、前掲、1923・12)を支持する人生のための文

学へと進展しつつある姿を示すものと言える。

こうしてみると、それは、自然主義の思想的消極的側面（失望落胆の文学・悲哀の文学に止まること）からの脱却の一步を意味する。しかしそれと同時に、自然主義の技法（実地の観察と忠実な描写）を否定したものではない⁽⁶⁷⁾。ただその後の茅盾の歩みから考えれば、この踏みだされた「新しい一步」はさらに次の飛躍のための、模索の過程の一步であったと思われる。

さて、茅盾は1922年5月、「五四運動と青年們底思想」(『民国日報 覚悟』、1922・5・11、『茅盾全集』第14巻、人民文学出版社、1987)という講演で次のように述べている。

「私も思想変動というこの渦巻きの中に混じる一分子です。最初自分の心を安んじる依るべき所を見つけないことができなかったために、同じように深い煩悶を感じました。しかし近頃私は一つの道を見つけました。私の終局の希望を、その上においています。そのためすべての煩悶は、雲散霧消しました。これはどのような道か。すなわち私は マルクスの社会主義 を確信したのです。」(「五四運動と青年們底思想」、前掲、1922・5)

1922年5月の段階では、茅盾は「マルクスの社会主義」を確信したと述べる。この講演の一ヶ月前、1922年4月10日付け王晋鑫宛て書簡で茅盾は、「私は今テーヌ(Taine)の純客観的批評法を最も信じています。この方法は欠点がありますが、しかし正当な方法です。」(『小説月報』第13巻第4号、1922・4・10)と言う。恐らく、1922年中頃の段階において、茅盾はマルクス主義の立場から、社会変革の思想と、文芸を総合的に分析し把握していたのではないことが分かる⁽⁶⁸⁾。1923年の末頃以降、初めて、マルクス主義を確信する者として中国変革と文芸の問題を理論的に関連づけるような方向で考える必要を感じ始めていると思われる⁽⁶⁹⁾。それはすでに「新しい一步を踏み出した」後の茅盾の姿を示すものであろう。

二、新ロマン主義の理想（「非戦」）・思想（「民衆芸術」）の否定

この後、茅盾は中国変革・国民革命を目指す文学者としての道をさらに進むことになる。その側面を映し出すこの間の茅盾の評論を二篇取り上げる。1924年4月茅盾は「拜倫百年紀念」(『小説月報』第15巻第4号、1924・4・10)において、バイロンの二側面を指摘した。

「二人のバイロンがいる。ひとりには傲慢放縦、利己的、肉欲に偏るものである。もうひとりには義憤に燃え、義侠心にとみ、気高いものである。前者はバイロンの前半生を代表し、後者はバイロンの後半生を代表する。」(「拜倫百年紀念」、前掲、1924・4)

ただバイロンの前半生の放縦は、英国社会の冷たい仕打ちに対する反抗であり、決して理由のないものではなかった。

「今、私たちがバイロンを記念するのは、彼が反抗の精神にとむ詩人であり、旧習慣・旧道徳を攻撃した詩人であり、革命に従軍した詩人であるからである。放縦利己的な生活は、私たちの青年が行おうとはしないものである。それは、まさしく本来バイロンが若い頃行おうとした生活ではなく、晩年には彼の生活はあのように短いものではあったが後悔したことである。」(「拜倫百年紀念」、前掲、1924・4)

茅盾は、バイロンの消極的側面が英国社会に対する反抗であったことを指摘して、その放縦利己的な前半生の生活に対する一方的批判を避けながら、なおバイロンの積極的側面(旧習慣・旧道徳を批判し、革命に従軍したこと)を顕彰する。

また、茅盾は「对于泰戈爾的希望」(『< 民国日報 > 覚悟』、1924・4・14、『茅盾全集』第18巻、前掲)で、当時中国を訪問したタゴールの二側面を指摘し、中国の社会的政治的現状、青年の現状に基づいて次のように言う。

「私たちは彼が弱者を憐れみ、被圧迫者に同情する人であることに尊敬を払う。私たちはさらに、彼が農民支援を実行した詩人であることを尊敬する。私たちはとりわけ、彼が愛国精神を鼓舞し、英国帝国主義に対するインド青年の反抗を巻き起こしたことを尊敬する。」(「对于泰戈爾的希望」、前掲、1924・4・14)

「しかし私たちは、東方文化を高唱するタゴールを歓迎しない。詩と魂の楽園を作り出し、私たちの青年をその中に引き入れて、陶醉瞑想させ慰撫するタゴールを歓迎しない。」(同上)

なぜなら、タゴールの「東方文化」とは奴隷生活を通して得られる死者の世界にほかならないからだとする(「太戈爾与東方文化」、『< 民国日報 > 覚悟』、1924・5・16、『茅盾全集』第18巻、前掲)。

茅盾は、被圧迫者のために戦い前進するタゴールの側面を歓迎する。茅盾によれば、中国の当時の現状とは次のようであった。

「中国が内憂外患のこもごも迫りくる二重の圧迫 国外の帝国主義と国内の軍閥の専制のもとにあるとき、唯一の活路は中華民族の国民革命である。」(「对于泰戈爾的希望」、前掲、1924・4・14)

また1924年当時の文学界における反動的攻勢に対して、茅盾は、「私たちは連合戦線を作り、このまさに到来しつつある反動の潮流に反抗しなければならない。」(「文学界的反動運動」(『文学』週報第121期、1924・5・12)とし⁽⁷⁰⁾、新文学界の様々な流派による連合戦線を主張した。

唯一の活路としての国民革命を支持し、マルクスの社会主義を確信する文学者として、茅盾は1924年頃から新ロマン主義者(ロマン・ロラン)の理想・思想に対してさらに詳

細な検討と批判を加え始める。1924年8月4日（「欧戦十年紀念」、『文学』週報第133期）にはロマン・ロランの「非戦」の理想を、また1925年5月10日（「論無産階級芸術」、『文学』週報第172期 第1章）には同じく「民衆芸術」の思想を、俎上に載せて検討し批判を行う。

第一次世界大戦において、多くの文学者は従来の自己の理想・主張を捨てて、祖国防衛という理由のもとに戦争を支持した。しかし他方理想を貫いて「非戦」を主張したロマン・ロラン等も、いま1924年現在において、結局は無力であるとする。

「また 非戦 の文学者も存在した。例えばロマン・ロラン（Romain Rolland）、エーデン（F. Eden）である。彼らは根本的に戦争を否定し、その当時においての 精神的 独立者 であった。彼らはこのたびの大戦にもしも意義があるとすれば、その意義は欧州の精神的文明の再建にある、と宣言した。彼らはたくさんの団体を組織することに力を注ぎ、その主張を宣伝し運動した。将来再び同じような人類の大屠殺が起こるのを防止しようと努力した（ロマン・ロランは何度もこのように述べている）。しかし現在彼らの努力には結局どういう効果があったと見るべきだろうか。大戦後の世界は、大戦前の世界に比べて決して良くなっていない。帝国主義が進攻する情勢はかえって大戦前よりも一層緊迫しているだけである。」（「欧戦十年紀念」、『文学』週報第133期、1924・8・4）

茅盾は、欧州大戦という一つの政治的行為、戦争に対する文学者の態度を吟味する。その中で、人道主義の立場にたち非戦を貫いた良心的作家たちに対して、その非戦を貫いたことを高く評価しつつ、しかし1924年の現状においてはその努力が効果を現さず、結局のところ新たな戦争への事態は一層緊迫しているとする。

「大戦からすでに10年になる。西欧の各帝国主義国家は力を回復しており、第二次大戦は近い将来にあるのかも知れない。そのときになって世界の文学者はまた、どのような態度を採ろうとするのだろうか。帝国主義者のために無産階級を戦場に駆りたてるのは、もとより文学者の恥辱である。非戦 を空言するもどんな効果があるうか。ただ無産階級が連合して自分のために闘うことだけが、世界の永遠の混乱を終わらせ、帝国主義者の 一日おきのマラリヤ のような、永久に切れ目のない屠殺を終結させることができる、と信ずる。」（同上）

無産階級が連合し、自らのために闘うことだけが、世界大戦が迫りくる現在の事態を救済し混乱を終結させる⁽⁷¹⁾。ロマン・ロランの非戦の理想は今日の事態においては、空言に等しいとする。これはロマン・ロランの理想、「非戦」の理想に対する1924年当時の現状に基づく明白な批判である。

さらに1925年5月10日「論無産階級芸術」（『文学』週報第172期 第1章）において、茅盾はロマン・ロランの「民衆芸術」を取りあげ次のように言う。

「ロマン・ロランの民衆芸術とは、結局のところ有産階級知識人界の一種のユートピア思想にすぎなかった。ロマン・ロランは空しく、『民衆のための、民衆のもの』であってこそ、民衆芸術であると言う。これは、民主主義者が喜々としてFor the people, of the peopleと言う政治と、ちょうど同じ美名ではないか。『全民衆』とはいかにも笑うべき名詞となろうとしているのではないか。私たちが目にするのはあれこれの階級であって、階級に分かれていない全民衆というものがあるか。」(「論無産階級芸術」、『文学』週報第172 第1章、173 第2、3章、175 第4章、196期 第5章、1925・5・10、17、31、1925・10・24)

矛盾はロマン・ロランの「民衆芸術」の思想を「適切さを欠き、不明瞭で、ユートピア式である」(同上)として否定する⁽⁷²⁾。

このように矛盾は、ロマン・ロランの理想・思想を、すなわちここでの人道主義的な「非戦」の理想を、世界の帝国主義国の現状、帝国主義国による第二の大戦が迫りつつある現状から否定し、また「民衆芸術」の思想を社会の階級構成の認識から否定した。このことを通じて、矛盾は、1925年以降マルクス主義文芸理論に基づく考え方を打ち出すことになる。すなわち矛盾は、中国変革者としての情勢認識に基づいて「非戦」の理想を批判し、また階級認識に基づいて「民衆芸術」の思想を批判している。しかし言い換えれば、ロマン・ロランの文学の価値(その文学の歴史的社会的価値を含めて)、またその思想の歴史的価値を否定したのではない⁽⁷³⁾。(また、矛盾がここで始めてロマン・ロランの「民衆芸術」の思想を厳しく否定したことは、これまで矛盾の内面に根を張ってきたその思想が、いかに根強いものであったかを裏書きする。⁽⁷⁴⁾)

さて、これまで矛盾は一つの文学思潮の思想と技術を、区別して考えてきた⁽⁷⁵⁾。1922年頃まで、その時その状況において矛盾によって主張された文学思潮は、中国の現実、中国の文学界の現実に対する認識を漸次深めつつ、その現実認識に基づいて、時には思想的側面を重視し(新ロマン主義の理想) 時には技術的側面を重視して(自然主義における実地の観察と客観的描写法)、対症の良薬としての性格を強めながら採用され主張された。このように、新ロマン主義と自然主義という二つの文学思潮(創作方法)が波動のように起伏消長しつつ、その位置づけと内容の深化をそれぞれともなって移行・進展してきた。そしてその中心軸には、旧社会旧文学の変革を目指す人生のための文学(人生を反映する、人生のための文学)が存在した。旧社会に対してそれは、暗黒の暴露となり、目覚めた人間の苦悶の表現となった。旧派文学・旧文学の暇つぶし、無病呻吟の文学に対して、真情を流露する、感情を疎通する人間の文学が主張された。すなわち人生・社会を直視し、その改善を切望する人道主義的な思想に基づく人生のための文学が、二つの波動の中心軸に一貫して存在していたと言える⁽⁷⁶⁾。1922年7月には、中国の文学界の現状分析に基づき、その対症療法としての自然主義が主要な主張となって、懇切詳

細に提唱された。しかし1923年頃から茅盾は、中国の青年が意気消沈する現状に対して再認識を行い、また『中国青年』の主張を受けて、青年に積極的に働きかけ励ますことができるような、現状の変革に一層貢献するような文学（新ロマン主義の文学を念頭にして）に再び言及する。文学論の中心軸として存在した旧社会旧文化の変革をめざす人生のための文学は、悲哀に止まる文学をも容認するところから一歩進んで、国民革命を支持する人生のための文学へと進展しつつあったと思われる。このことと関連して、茅盾は1924年において、パイロン・タゴールのそれぞれの二側面を指摘しつつ、文学固有の価値よりも、その社会変革に関わろうとする積極的な両者の文学的行動的側面を、高く評価しようとした（しかし上記のことは、自然主義の技法、実地の観察と忠実な描写を否定したことを意味するものではない）。

では、1924年25年において茅盾はなぜ、ロマン・ロランの人道主義的「非戦」の理想、「民衆芸術」の思想を、「空言」或いは「ユートピア式」として厳しい否定によって退けようとしたのであろうか。言い換えれば茅盾はなぜ、ロマン・ロランの理想と思想における進歩的合理的側面を、理論的に総括し、批判的に継承・発展させようとはしなかったのだろうか。

茅盾の姿勢は、中国（或いは世界）の文学・社会に対する現状分析に基づき、中国における文学の在り方を追求するという点では、以前と同じである。しかしここでの現状分析は文学の、文学界固有の問題に対するものではなく、中国の情勢、世界の情勢（迫りくる新たな世界大戦の可能性）の現状分析であり、文学者としての文学的側面の内部要求（個性、自我）にのみ基づくものと言うよりは、むしろマルクス主義の立場にたつ中国変革者としての内部要求の方に重心があるものと言える⁽⁷⁷⁾。中国変革者としての内部要求に重心があるという点は、政治情況から言えば、1923年末頃から始まる国民革命への機運を強く映しだしているものであった。新ロマン主義と自然主義という二つの波動（文学思潮・創作方法）を貫く、旧社会旧文学の変革を目指す人生のための文学という中心軸は、1924年中頃にはすでに、中国変革者としての内部要求に基づき、国民革命（民族独立と民主革命、恠代英、「八股？」、前掲、1923・12）を支持する人生のための文学の探究の方向へと模索しつつ進展していたと思われる。そしてこの場合先ほど触れたように、ロマン・ロランのような良心的作家の理想・思想（「非戦」の理想、「民衆芸術」の思想）に対して、その進歩的合理的側面を、理論的に総括し、批判的に継承・発展させる姿勢が、茅盾には乏しかった。そしてこれは大きな思想的状況から言えば、茅盾個人の問題と言うよりは、むしろ当時の中国におけるマルクス主義とその文芸理論の未熟な一面の反映と考えた方がよいと思われる。

また茅盾の個人的思想的状況から言えば、特にロマン・ロランの良心的な「民衆芸術」の思想は彼の内面に根づいていたものであった。「民衆芸術」の思想を、マルクス

主義文芸理論の立場から理論的に総括し、批判的に継承・発展させる基盤がない状況の下で、すなわち内面的に克服する条件のない中において、茅盾は表面上それを厳しく斥けることによって、新たな道に進もうと意図したと思われる。

1925年茅盾によって新たに主張される文学は、ロマン・ロランの「非戦」の理想、「民衆芸術」の思想を否定したうえで、旧来の中心軸であった旧社会旧文化の変革を目指す人生のための文学と、さらにそれから進展してきた、国民革命（「民族独立と民主革命」）を支持する人生のための文学を、「止揚」した姿をとって現れる。すなわちそれは被抑圧民族・被抑圧階級の人生のための文学の姿を取って現れた。（それは他面から見れば、ロマン・ロランの「民衆芸術」の「止揚」された姿とも、言えるのではないだろうか。）言い換えれば、1925年頃まで漸次進展してきた旧来の中心軸は、ここに新しい中心軸へと「止揚」された。このことについては次節で述べることにする。

注

(57) 「茅盾（沈雁冰）と『牯嶺から東京へ』に関するノート（一）」（『言語文化論集』第21巻第2号、名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科、2000・3）の注3、「茅盾（沈雁冰）と『牯嶺から東京へ』に関するノート（二）」（『言語文化論集』第22巻第2号、名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科、2001・3）の注34であげた文献以外の、その後目を通した資料を次に掲げる。

〔日本〕

- 1, 「秦徳君手記 櫻屋」(『野草』第41号、1988・2・29)
- 2, 「秦徳君手記 櫻屋 続 付録秦徳君女士伝略」(『野草』第42号、1988・8・1)
- 3, 「『秦徳君手記 櫻屋』解説」(是永駿、『野草』第42号、1988・8・1)

〔中国〕

- 1, 「茅盾早期文芸思想の本質特徴」(李庶長、『茅盾研究』第4輯、文化芸術出版社、1990・3)
 - 2, 『茅盾早期思想新探』(丁柏銓、南京大学出版社、1993・7)における「作為時代弄潮兒の早期茅盾及研究茅盾早期思想的方法(代前言)」の章と第3、4、5章。この書は、周先民氏(名古屋大学文学研究科博士課程後期課程修了)のご尽力により1999年3月に入手できました。ここに記して深く感謝いたします。
 - 3, 「茅盾的社会 - 歴史批評与 作家論 批評文体」(温儒敏、『中国現代文学批評史』、温儒敏、北京大学出版社、1993・10)
 - 4, 『茅盾的文論歷程』(莊鐘慶、上海文芸出版社、1996・7)の第1章、第2章
 - 5, 「転折期的精神浮沈与演進 茅盾写作 從牯嶺到東京 前后思想透視」(丁柏銓、『茅盾与二十世紀』、中国茅盾文学研究会編、華夏出版社、1997・6)
 - 6, 『茅盾評伝』(丁尔綱、重慶出版社、1998・10)の第2章、第3章
 - 7, 『茅盾 翰墨人生八十秋』(丁尔綱、長江文芸出版社、2000・12)の第2章
- (58) 「告研究文学的青年」(秋士、『中国青年』第5期、1923・11・17)では青年の状況を次のように言う。
- 「中国は現在、情勢が日一日と悪化していると言える。青年は現在、大志も日一日と冷めている

と言ってもよい。中国の問題の解決は、必ずや中国の青年に待たなければならない。しかし中国の青年がこのようにひっそりと沈みこんでいて、中国になお希望があるのだろうか。」

また、1922年8月の早い段階でも「青年的疲倦」(『小説月報』第13巻第8号、1922・8・10)において青年の疲弊についての論がある。ただそれは、事実の指摘に止まる。

- (59) 「雑感」(『文学旬刊』第74期、1923・5・22)ではなお、失望消沈の中にも希望を見いだすことができる文学に触れ、次のように言う。

「批評家はまた次のように言う。日露戦争後、ロシアは興奮から失望に入る。その数十年間のいわゆる 灰色の生活 にも二人の大芸術家 チェーホフとアンドレーエフ がいて、その生活の画像を残した。この二人の作家は目を見開いて当時の卑しくまた意気消沈した人生を正面から詳細に見た。彼らは失望し、憤激が極点にまで達したために、怒りで叱る言葉も出ずに、ただ冷笑するだけだった。しかし彼らはまた困惑の中にも、遠い将来に夜明けがある と確信していた。そのため彼らの作品は読者がため息を出し涙を流した後、また知らず知らずのうちに元気をさせ、活気がまた私たちの心によみがえってくる。これもチェーホフとアンドレーエフの偉大なところである。(中略)私は中国にもチェーホフとアンドレーエフのような作家が生まれることを望んでいる。」

チェーホフとアンドレーエフ（二人をロシア写実主義の流れに属するものと茅盾は当時考えていた）に対する茅盾の見方は、「俄国近代文学雑譚 下」(『小説月報』第11巻2号、1920・2)「安得列夫的死耗」(『小説月報』第11巻1号、1920・1)における見方とほとんど変化がない。ただ、1923年の時点においては、中国の現状とりわけ青年の現状に基づいて、彼らのような、失望落胆する中にも「遠い将来に夜明けがある」ことを信ずる作家の、出現することが待たれるとする。

また、茅盾個人の内面から言えば、『ジャン・クリストフ』(ロマン・ロラン著)は、悪い環境の中にあっても悲観せず、万難をへて意気消沈しない真の勇気を教えてくれる彼の愛読書であり、『リュクサンブールの一晩』(ゲールモン著、私が目を通した本は、『魯森堡之一夜』古爾孟著、鄭伯奇訳、泰東図書局、1922・5・1初版、1926・8再版。内藤忠和氏 島根大学法文学部、中国近現代文学 の御好意により、北京大学図書館所蔵本のコピーを手に入れることができました。ここに記して深くお礼申し上げます。)は、現代人の煩悶を取り除く方法を教えてくれる愛読書であったことが分かる。

- (60) 『茅盾早期思想新探』(丁柏銓、南京大学出版社、1993・7)で次のように指摘する。

「文学功用観の問題で茅盾に一步前進させた大きな動力は、『中国青年』からきているとすべきである。鄧中夏・蕭楚女・恽代英等の早期共産党員は新文学の問題を解明し唱導した一連の言論を『中国青年』に掲載した。」(第4章)

- (61) 『文学』週報第101期に副題はない。いま、『茅盾全集』第18巻(人民文学出版社、1989)によって補う。しかし『茅盾全集』第18巻では、「雑感 読代英的『八股』」となっているので、本来の原題「八股?」に基づくことにする。

- (62) 蕭楚女は「詩的生活与方程式的生活」(『中国青年』第11期、1923・12・29)で次のように言う。

「前進する人生の道には、二つの生活方法がある。一つは現実を回避し、わざと曲折の多い道を歩き、目をつむって社会の一切の罪悪を見ようとししないものである。想像の中で別に意になかった幻想を作りだし、それによって楽しむ。もう一つは現実に近づいて見つめ、現実がいかに醜悪であろうと、いささかも恐れず、群がる罪悪の中から真っ直ぐに通り返れる。勇

敢に奮闘し、罪惡一掃の仕事に従事して、人類のために広い道を切り開き、衆生を救済しようとする。」

蕭楚女は、後者の厳しい自律的生活に人生方程式の論理的価値があるとし、人間としての意義を果たすものとする。現実を回避し、幻想の中に入るのではなく、現実を見つめ奮闘することに価値をおいている。

- (63) 茅盾は「創作的前途」(『小説月報』第12巻第7号、1921・7・10)で、現代人の煩悶を訴えることについて次のように言う。

「文学の使命は、現代人の煩悶を訴えて、数千年の歴史的遺産である人類共通の偏った心・弱点から抜け出すように援助し、無形のうちに歴史的束縛を受ける現代人の情感を相互に疎通させ、人と人との間の無形の境界線を段々と消滅させることにある、と考える。」

また、茅盾は1922年6月10日付け陳徳征宛て書簡(『茅盾全集 書信一集』第36巻、前掲)で次のように言う。

「私の偏見では、現在の時局は、悲壯慷慨の或いは失望消沈の創作がふさわしいときだと思いません。熱血を持ち、生活の圧迫を受けている人が、坐して古書を根気よく読むことがありましょいうか。私は、『文学とは社会の反映』であるという迷信を持つものです。現代人の苦痛の声、恨みの声を聞くことを好みます。古代の人の作り笑い嘔泣き、無病呻吟、淑やかな女性の歩きぶりといった不自然な行動をあまり耳にしたくありません。」

茅盾は、現代の社会を反映する悲壯慷慨の文学、失望消沈の文学を肯定する。それは無病呻吟の旧文学に対して真情の流露という面で評価され、また人々に煩悶を与えることを通じての意志疎通と、旧社会の病根の暴露につながるものとして評価されるものである。

また茅盾は、1922年5月10日付け黄祖詒宛て書簡(『茅盾全集 書信一集』第36巻、前掲)では次のように言う。

「お手紙の第二段落と第三段落を読みますと、『現代人の悲哀』がすでに先生の心に入りこんだと推察いたします。私の浅見によりますと、これこそ現代文学の最も重要な精神であります。」

- (64) 茅盾は「什麼是文学」(『學術演講録』第2期、1924、松江暑期演講会 1923年8月の講演原稿、『茅盾全集』第18巻、前掲)で次のように言う。

「新文学は積極的であり、名士派は消極的である。新文学は社会の暗黒を描いて、分析的方法によって問題を解決しようとする。詩には個人の情感を多く表現し、その効用は読後に社会的な同情と慰め、煩悶をあたえることにある。」

社会の現実と積極的に関わる方向に一步踏み出して、新文学の在り方を求めようとしていたと思われる。

- (65) その他、鄧中夏は、「貢獻於新詩人之前」(『中国青年』第10期、1923・12・22)で次のように言う。

「現在の新詩人は実に私たちを失望させる。彼らはほとんどが『漢あるを知らず、魏晋のことは言うまでもない』ありさまで、自分のいるところがどのような時代と環境であるのか理解していない。彼らは社会の全体的情況について曖昧にしか知らず、民間の真の苦しみについては冷淡である。彼らの作品は、上等のものは性情を喜ばせる快樂主義であるか、そうでないものは天を恨み人を憂える類廢主義である。一言で言えば、社会を問うことのない個人主義である。下等のもの、無病呻吟して、訳の分からないものだ。」

- (66) 原題は、「詩的生活与方程式的生活」(『中国青年』第11期、1923・12・29)である。

- (67) 茅盾は1932年11月、「『法律外的航綫』読后感」（『文学月報』第1巻第5、6号合刊、1932・12・15、『茅盾全集』第19巻、人民文学出版社、1991）で沙汀の小説集を取りあげ、次のように言う。

「私からみると、『碼頭上』はあの古い 公式 の新しい姿である。（中略）私たちは当然帰る家のない浮浪する子供達を描く価値があるし、そして意義のある作品を書くことができる。しかし大事な点が一つある。作家はまず必ず實地にこれらの浮浪する子供達の生活を観察し、そして革命的意義が豊かにある部分を発見して、そののちに描写しなければならないことである。」
ここでは實地に観察し、新たに認識を獲得して、それに基づき描写することの重要性が指摘される。これは写実主義（自然主義の技法＝實地の観察と忠実な描写）を継承する内容であると思われる。

- (68) 茅盾はまた、『文芸批評』雑説」（『文学旬刊』第51期、1922・10・1）で次のように論ずる。
「五十年代フランスの大批評家サント・ブーブ（st. Beuve）は、実験室における科学者の客観的態度によって作品を批評することを主張した。作品を批評するにはまず作家の性格、環境と創作時の境遇を知らなければならないと言う。」

この主張の影響は大きかった。サント・ブーブ（1804 - 1869）の弟子テーヌ（1828 - 1893）は、「進化論の原則を直接的に文学批評に応用することを主張した。どのような偉大な天才であれ、決して時間と空間という二条件の外に自立することはできない。作家に対する時代思潮と社会背景の影響はきわまりない。作家の属する人種、作家のいる時代の社会現象・政治現象やその個人的環境、作家のいる時代およびその社会内の主要な思潮、この三者が、批評家のもっとも注意すべきことと考えた。」

これをテーヌは文学批評の「三段方式」と呼んだ。「彼のこの方法は正当で、しかも精密であった。」しかしテーヌは極端にまで走り、

「作家の個性の重要さと天才の直観力を完全に軽視した。時代が作家に与える影響に彼が注意したのは、本来間違ではない。しかし時には大作家が時代に影響を与えることもあり得ることを忘れてしまった。」

こうした科学的批評論（客観的）の流れに属するものに対して、「印象的批評論」（主観的）も出現する。アナートル・フランスは、「文学批評論は固定した原則を持つべきではない」とした。茅盾は、この点についてイタリアの批評家クロッチェの、「純粋な文芸批評は純粋な自己表現である」という言葉を引いて、「不易の至論」とする。

以上の茅盾の議論からすれば、この1922年10月の段階でも、彼はマルクス主義文芸理論の観点に到達してそこから文芸を分析していたのではないことが推察される。『茅盾早期思想新探』（丁柏銓、南京大学出版社、1993・7）に次のように指摘する。

「茅盾はマルクス主義政治観を受容したのが先であり、マルクス主義文芸観を受容したのは後である。二つの受容の間には 時間差 が存在している。」（第3章）

- (69) 茅盾は後に「五三〇 運動と商務印書館罷工」（『我走過的道路』上冊、生活・読書・新知三聯書店、1981・8）で、マルクス主義の立場から文芸論の追求を行ったことについて次のように言う。
「1924年に、鄧中夏や 惲代英、沈沢民等が革命文学のスローガンを提唱した。その後、私はソ連の文学を参考にして無産階級文学を論ずる文章を書こうと考えた。」

その目的の一つに、自らの過去における文学芸術についての観点を整理する考えがあったことを言う。ここで「革命文学のスローガンを提唱した」とするものは、「八股？」（惲代英、『中

中国青年』第8期、1923・12・8)「貢獻于新詩人之前」(鄧中夏、『中国青年』第10期、1923・12・22)、「文学与革命(通訊)」(惲代英、『中国青年』第31期、1924・5・17)、「文学与革命的文学」(沈沢民、『民国日報 覚悟』、1924・11・6)等を指していると思われる。

- (70) 茅盾は「進一步退兩歩」(『文学』週報第122期、1924・5・19)でも次のように言う。

「新文学界には近年文芸上の主義の違いのために、目立ってたくさんの流派が出現して自身の力量を弱くさせる主要な原因となっている。そのためこうした反動的攻勢に対処しようとするれば、第一に、新文学界は反動勢力を撲滅する連合戦線を結成しなければならない。第二に、新文学界は自己の歴史的使命 白話運動の普遍的宣伝と基礎固め を忘れてはならない、と思う。」
こうした反動的潮流(『学衡』派)に対する茅盾の反撃については、「茅盾早期思想研究(1917-1926)」(楽黛雲、『中国現代文学研究叢刊』1979年第1輯、1979・10、底本は『中国当代文学研究資料 茅盾專集』第2巻上冊、唐金海等編、福建人民出版社、1985・7)、『茅盾評伝』(丁尔綱、重慶出版社、1998・10)等に詳しい。

- (71) 「非戦と革命」(暁柳、『中国青年』第48期、1924・10・11)は非戦の運動によっては、戦争がなくなるとし、次のように言う。

「私は敢えて言う、革命 しかない。国内の軍閥が地盤を争う戦争をなくそうとすれば、軍閥を打倒する民衆革命がなければならない。国際間で帝国主義が市場を奪う戦争をなくそうとすれば、資本主義を打倒する世界の労働者階級の革命がなければならない。」

- (72) ロマン・ロランは「民衆劇論」(『ロマン・ロラン全集』第11巻、みすず書房、1982・5・20)で次のように言う。

「パリには二種の民衆がある。その一つは、貧窮から脱するや否や、中産階級に惹きつけられ吸収されたものであり、もう一つは、敗北して、自分よりも幸福な兄弟たちから見棄てられて、窮乏のどん底に横わっているものである。前者はもう民衆劇などを欲しない。後者は労働に疲れ、疲労にうちのめされて、芝居などに行くことができない。中産階級の政治はこれらの民衆のうち、後者を絶滅させ、前者を同化することにある。私たち自身の政策、芸術的で同時に社会的な私たちの理想は、この民衆の二つの断片をもう一度継ぎ合わせて、民衆全体にその階級意識を与えることである。」

ここからすれば、ロマン・ロランの「民衆」は、階級的な観点から分析された上で想定されていたものであることが分かる。ただその階級的観点とは、社会科学的なものと言うより、むしろロマン・ロランの理想を受けた階級概念であるように思われる。

また、ロマン・ロランは、「第1版序」(1903・11)で、「民衆による、民衆のための劇場を建てることである。」と言う。

- (73) 茅盾は「欧洲大戦と文学」(『小説月報』第15巻第8号、1924・8・10)で欧洲大戦が帝国主義諸国間の戦争であったこと、また今後、これを阻止するには各国無産階級の階級闘争による社会革命しかないことを指摘する。こうした展望のもとに、欧洲大戦をめぐる様々な文学を論じる。その中にロマン・ロランの小説「クレランポー」と戯曲「リリュリ」が取りあげられる。前者については、大戦時の知識人層の心理を描写した小説として高い評価があたえられる。また後者についても、詳細に内容を紹介し、中でもキリスト教が帝国主義者の手助けをし、人民を欺いてきた罪悪を暴き、また社会の支配層(外交家)に対する強烈な風刺を行っている、と茅盾は高く評価する。ここからすれば、ロマン・ロランに対する批判は、決してロマン・ロランの文学上の価値に関するものではなく、主として茅盾の世界情勢の認識・中国変革者として

の立場からなされた、ロマン・ロランの「変革」の思想に関連するものであったことが分かる。また、茅盾は1935年に、「非戦的戯劇」(『立報 言林』、1935・12・26、底本は『茅盾全集』第20巻、人民文学出版社、1990)で、「現在上演すべきものは、帝国主義戦争の内幕を暴露したロマン・ロランの脚本『Liluli』であると思う」と言う。1935年当時の中国の情勢に基づき、茅盾は戯曲「リリュリ」を上演する意義について高く評価している。なお、ロマン・ロランに対する茅盾のより客観的評価は、「永恒的紀念与景仰」(『抗戦文芸』第10巻第2、3期、1945・6、底本は『茅盾全集』第33巻、人民文学出版社、2001)に見られる。またこの1945年の文章の中で、ロマン・ロランの「若望・克利司朵夫向中国的弟兄們宣言」(ロマン・ロラン、1925・1、『小説月報』第17巻第1号、1926・1)を読み、茅盾達が民主主義を求め光明を追求する闘争の中で、決して孤立しているのではないという気持ちを持った、と言及する。少なくとも1926年1月頃の段階では、被抑圧民族・被抑圧階級の立場からの闘争において、ロマン・ロランの発言によって茅盾は勇気づけられていると思われる。こうした経過から見ると、1925年におけるロマン・ロランに対する茅盾の否定は、ロマン・ロラン自身の理論的進展を十分に把握した上のもではなかった。またその否定はそれまでのロマン・ロランに対して理論的総括と批判的な継承・発展がなされた上でのものでもなかったと思われる。

- (74) 茅盾は後に、「五三〇 運動与商務印書館罷工」(『我走過的道路』上冊、生活・読書・新知三聯書店、1981・8)で「論無産階級芸術」の内容と意義を回顧する。その文章で、ロマン・ロランの「民衆芸術」の思想を批判し、それが有産階級知識人界のユートピア思想であるとして、次のように言う。

「ここで、実際には、私は自分の初期の或る文芸観を否定した。『商務印書館編訳所』の章で、私は初期の文学芸術観に概括的に触れた。写実主義と新ロマン主義を提唱し(後者の代表がロマン・ロランである)進化した文学、平民のための文学に賛成し、芸術は人生のために、社会のために貢献しなければならぬと主張した。私の観点は後に発展と変化があるけれども、明確に階級的観点によって初期の文芸思想に修正と補充を加えたのは、この文章(「論無産階級芸術」を指す 中井注)から始まる。」

初期の或る文芸観(ロマン・ロランの「民衆芸術論」)を「否定」し、階級的観点に立って、初期の文芸思想に「修正と補充」を加えたと言う。

このことについては、前に触れたように、決してロマン・ロランの文学上の価値を否定したことを意味しない。中国変革者の立場から、「民衆芸術」の思想の欠陥を指摘したという性質のものであった。逆に言えば、茅盾が1925年ここで「否定」した新ロマン主義の「民衆芸術」の思想は、1920年頃の「初期の或る文芸観」でもあり、その後茅盾の内面に1925年頃まで根づいてきたものでもあった、と私には思われる。本文の1923年6月12日の「雑感」における発言(『ジャン・クリストフ』と『リュクサンブールの一晩』について)ばかりでなく、1921年春『文学旬刊』を発刊した頃、茅盾は演劇俳優汪仲賢の求めに応じて、劇社の発起人の一人となった。そのとき茅盾はロマン・ロランの唱導する「民衆劇場」のことを念頭に「民衆戯劇社」という名称を提案している(「複雑而緊張的生活、学習与闘争」、『我走過的道路』上冊、生活・読書・新知三聯書店、1981・8)。

- (75) 茅盾は「一年来的感想与明年的計画」(『小説月報』第12巻第12号、1921・12・10)で次のように言う。

「文学者は非常に混乱する人生の中で、永遠の人間性を探し求めようとする。他人を理解しよう

とし、自己を表現して他人に理解させようとする。人と人の間の溝を埋めようとし、人と人との間の願望をひとつにしようとする。それゆえ文学は人の精神的糧である。(中略)西洋人が文学の技術を研究して得た成果は、私たちは採用できるし、或いは必ず採用しなければならないと信ずる。他人の方法(技巧)を採用することと、いたずらに模倣することとは別のことである。私たちは他人の方法を使って、自分の想像情緒を加える……、その結果自らのすばらしい創作を手に入れることができる。」

また、「自然主義的懐疑と解答 復周志伊」(『小説月報』第13巻第6号、1922・6・10)で次のように言う。

「私自身の現在の見解によれば、私たちが自然主義を採り入れようとするのは、決して必ずしもすべての点で自然主義に学ぼうとするものではないと考える。自然主義派文学の含む人生観から言えば、まことに中国の青年に良くないかも知れない。しかし私たちがいま注目するのは人生観としての自然主義ではなく、文学としての自然主義である。私たちが採用するのは、自然主義派の技術上の長所である。」

- (76)「茅盾の自然主義受容と文学研究会」(是永駿、1972、前掲)は、「人間性追求を保証する描写方法として、現実直視を極点にまで推し進めた自然主義を移入したことが、茅盾における自然主義受容の基本的な視点である」とする。すなわち茅盾の文学観の基底には人間性の追求があり、それを保証したものと自然主義の描写方法があったとする。

私はこれまで述べてきたように、自然主義に加えて、新ロマン主義の提唱をも本文のように組み入れて理解する。新ロマン主義の理想・思想は恐らく茅盾の内面に根づいていたものである。中国、中国の文学界の現状認識における深化する要請に基づいて、その理想・思想が1920年頃そして1923年頃に表層に上昇し、新ロマン主義の提唱と再浮上となったと考える。

「鄭振鐸の『血と涙の文学』提唱と費覺天の『革命的文学』論 五四退潮期の文学状況(二)」(尾崎文昭、前掲、1989)は、1920年21年頃茅盾には社会・民族の普遍的弱点を研究し描き出す、こうしてこそ人生を表現する文学となる、とする発想があったとする。「この頃(1920・21)茅盾は新浪漫主義を理想としていたが、この発想は1922年からの自然主義提唱に素直につながり、のちの革命文学の発想にも素直につながりうる。」と指摘する。私が本文で述べる意図の一つは、こうした「つながり」の具体的ありようを検証するとともに、茅盾の文芸論における内的構造を、また諸関連とその変遷を、明らかにしたいという点がある。

- (77) 茅盾が当時の中国の状況に誠実であろうとした点において、「救亡の論理」(李沢厚、「啓蒙と救亡の双重変奏」、『中国現代思想史論』、東方出版社、1987・6)に組みするものではなからうか。茅盾と郭沫若を「救亡の論理」から比較してみる。茅盾は中国、中国文学界の現状分析に基づいて、文学の在り方を追求しようとしていた。現状分析の仕方は緻密で、リアリズム(客観的描写の精確さ)による人生のための文学に基づくものであった。しかしこの1924・5年において自己の良心に忠実であろうとしたロマン・ロラン等を否定し、当時の中国の状況に応じてさらに適合する文学を主張しようとする。他方、郭沫若は1924年頃以降、中国の社会政治状況の分析から、その状況の要請する文学の在り方を導こうとした。そして旧来の自己(個性、内部要求)を小ブルジョア知識人のものとして全否定し切り捨て、自らは直接的社会行動をとろうとする。それはロマンティシズム(自我の表現の重視)による行動、新しい自我による行動と言えよう(拙稿、「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』提唱についてのノート(上)」、『言語文化論集』第12巻第2号、1991・3、同、「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』

茅盾（沈雁冰）と「牯嶺から東京へ」に関するノート（三）

提唱についてのノート（下）、『言語文化論集』第13巻第1号、1991・11）、創作理論の面から言えば、両者の違いはおおむね画然としている（ただ郭沫若は1925年以降リアリズムへの接近を試みている）。しかし両者の中国の現実状況に対する基本的思考・態度は、「救亡の論理」に従うものという点で共通してはいないだろうか。この点からすればこの時期、郭沫若と茅盾は、表面上よく似た位置に立っていたのではないか。社会主義思想に対して有島武郎があくまで自己の実情から出発して対処する姿勢をとったように、魯迅は中国の激動する情勢に対してあくまで自己（内部要求）から、自己の実情（良心）から出発しようとした（「啓蒙の論理」）。こうした有島武郎・魯迅と比較すれば（拙稿、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」、『大分大学経済論集』第33巻4号、1981・12）、この時期において郭沫若と茅盾の二人はその表面上の隔たりとは別に、むしろ意外に近いところに立っていたと思われる。

茅盾のこの時期における文学評論の中に、政治的観点の進展を明確に見ようとする論文に、莊鐘慶の専著（『茅盾的創作歷程』、1982、前掲、第2章）がある。